

書 評

『トマス・アクィナス 神学大全Ⅲ 1－6』25 山田晶 訳 創文社1997年

神学大全は全体が三部に分けられている。第一部は神の存在、三位一体そして創造について、第二部は一部と二部に分けられて人間の倫理また正しく生きるための神の恵による援助について。この書評の対象となるのは第三部はキリスト論と秘跡について論じた部分である。今回、翻訳されたのは第三部の最初の部分で神が人となったというキリスト教信仰の核心とも言うべき「受肉」について論じた部分である。

これまで第一部は神の存在証明などについて哲学的な関心が払われ、第二部も倫理学や人間学的なものに関心が払われてきた部分であったが、第三部はキリスト教の信仰の対象そのものであり、また未完ということもあってあまり関心が持たれていなかった部分である。

しかし、この山田晶氏の翻訳というよりも注解とも言うべき労作のおかげで、そこで如何に魅力あふれる思索が行われているのかを親しく知ることができるようになったことは大変喜ばしいことである。

『神学大全Ⅲ 1－6』の内容は次のような神学大全共通の構成になっている。

ここでは「受肉の適合性について」という大きな問いが掲げられる。それに答えるために、まず「神が受肉することは適当であったか」という問いの一項が設けられる。

そこで最初に「異論」が出され、「神が受肉することは適当ではなかったと思われる」という意見が幾つか提示される。

次に、正当的な信仰とされる「神が受肉することは適当であったと思われる」という意見として「反論」が提示される。

「本論」として、そのことについて「答えていなければならない」とトマスのこの問題についての解題がなされ問題点の理解が述べられる。

最後に、論に従って、最初に出された様々な立場からの幾つかの「異論」に対しての答えが一つずつ与えられて行く。

ここで中世のさまざまなキリスト論を「異論」「反論」「本論」を通じて知ることもでき、これまで名前のみであった異端の思索がどのようなものであるかもかいまみることが出来る。

この構成はトマスの神学大全は当時の初学者のために錯綜した議論を整理して判り易く教える教科書という役割があったからであろうが、「異論」の誤りを指摘しただけ否定するのではなく、どこが誤りで、どこに正当な言い分があるのかを丁寧に説明してくれるという大変対話的で親切なものである。異論とは我々を含む初学者の陥りがちな考え方の例でもある。

トマスがキリスト教思想の権威に祭り上げられて以来、何か権威によって「異論」を異端として糾弾し、誤謬として粉碎するようなイメージもあるであろう。しかし、トマス自身はどちらが正しいかをドグマティックに決めるのではなく、「異論」にも耳を傾け「異論」からも多く学び、真実に迫る対話をし、異端派も正統派も正しい道へ導いていくのである。その対話の営みこそ神学の婢と呼ばれたソクラテスの対話と同じ哲学の営みそのものである。「神学の婢」とは哲学を卑しんでそう呼んだのではなく、最も役に立つものとして認めていたということを示しているのである。対話を拒絶する権威としてトマスを読んだのは後世の人々であって、トマス自身は思想の御殿を作ることよりも大胆にして謙虚な哲学的な営みを田畑を鋤く牛のごとく黙々と行っているのである。

この第三部の第一問の一項の「神が受肉することは適当であったか」という問いは、神と人間の無限の距離と質的な違いが、神であり人であるキリストの中で一つになっていると信じられているが、それは正しい神と人間の認識であろうかと問うているのである。

この問いは「神であり人であるキリスト」の存在を否定してしまう可能性まではらんでいるのである。つまり、キリストがいなくなってしまうというキリスト教の基盤を覆すような危うい問いが発せられているのである。

よく、神学というものをキリスト教信仰及び思想を守るための「護教論」と同じものとして見る向きもあるが、「護教論」ならば敢えて最初に一番弱いところを曝すようなことはしないし、異論にも言い分があるなどということは言わないはずである。

護教論はセクトの教義や信念を固め護るためには役に立つであろうが、かえってお互いの心をとぎしてしまうのである。一晚中議論（ディベート）などをしても、ただ相手をレトリックによって折伏するだけのことであろう。護教論的神学では、心を柔軟にし、問題の問題点を明らかにし真理への道が自ずから開けて来るような接近をさせてくれるようなことはしていないのである。

筆者はこれまで「神であり人であるキリスト」の存在が何故可能であるのかということについて、玄義として信仰の対象として信じるだけのものと基本的には考えていた。ただ、人間の存在が100パーセント物質（質料）であると同時に100パーセント精神（形相）でもあるというアリストテレスの形相と質料の関係から、人間における物と精神という関係で、物の位置に人間を、精神の位置に神を置けば「神であり人であるキリスト」ということもアナロジーとして考えるのではないかと考えてきたのである。

しかし、第二問の「受肉した言の合一の仕方について、合一」について、筆者の考え方が誤りであることが明らかになった。つまり、「神であり人である」という場合には一つのペルソナにおいて神性と人性が合一しているのであって形相と質料が結び付くように一つにはなっていないことがあきらかにされ、何よりも形相としての神はいかなる質料とも結び付くことの無い存在であるからである。

これは筆者も読んだつもりだった第一部ですでに述べられていたところであったので、自らの浅い理解から生じた誤りを認めさせられたのである。これは「知っているつもり」の無知や知ってはいても十分な理解を伴わない「一知半解」を気付かせ、ドクマとしての

思想を解体するまさに哲学の営みの経験である。

筆者が学生時代に史的イエスの問題が話題とされ、神としてのキリストではなく人間としてのイエスにのみ注目することが新しい思想として流行っていた。しかし、これは信仰としては実に古代のアリウス派に通じる考え方でもあったことが本書の注釈で気がつかされた。

「受肉」にはパスカルが「イエスは世の終わりまで苦悩し続けるだろう」と言う神の子の人間の痛みと罪を背負い悩む「神の痛み」の根拠が示されているのである。また「受肉」については三位一体についての理解も必要となるところである。それについては本文と山田氏の注釈で理解できると思われる。

「受肉」は神の存在論や三位一体論で存在や神のペルソナの区別を認めたとしても、まだ感じることの出来なかったリアリティーを感じさせてくれる理論的な根拠となっている。

読んでいて、感じるのはよくこんなことまでも考え、頭を自由に働かせるものだということである。友村(種山)恭子氏の訳されたホワイトヘッドの「観念の冒険」(中央公論社)とはこのような経験のことではないかと思われた。

信じてしまえばそれまでなのに、信じていることは何なのかと問い返して来るのである。これはプラトンの対話篇のように自明であると信じ込んでいることをアポリアに陥らせ本当は無知であったと認めるまでに至らせる態度と良く似ている。

トマスには原理主義(ファンダメンタリズム)のように知性を犠牲にして信仰を貫こうとする独善性が全く無い。信仰が直感したものが何であるのかを知性を駆使して理解しようとするのである。まさに、知るために信じ、信じるために知ると信と知の営みがどのようなことか分かってくる。信仰は独断と偏見のドクサ(思想)を克服することによってより純粋なものとなって行くのである。

オウム事件において世間では宗教教育を復活させようという意見が多く出されたが、不足しているのは宗教的な知識や思想ではなく、自らが何を信じて何をしているのかを本当によく検討し理解する哲学があまりにも不足しているのである。過去の宗教教育を懐かしむのではなく、そのことを自覚すべきであったと。ただ、哲学ではなく思想として受け止められると、このトマスでさえも理解する対象ではなく、発展性の無い教義(ドグマ)を覚えるだけの教科書とされてしまうのである。トマスの中に在る柔軟な対話を忘れ、旧くさい権威主義の代表選手させられてしまったのである。

神学大全Ⅲはこれまでの議論を前提にしているために大変簡略化されて書かれている。しかし、この山田晶訳の「神学大全Ⅲ 1-6」の訳はまさにトマスの意を汲んで、初学者にも分かるように実に丁寧な注釈を付けて下されている。だから、既に山田氏の訳された世界の名著『トマス・アキナス』(中央公論社)とこの巻だけでも読めば神学大全についてかなり多くのことが分かって来ると思う。

筆者がかって信濃町の真生会館で神学大全第一部の初めの部分だけを読んだときでも、読み初めて一年たって、最初に読み始めたときの自分はずいぶん謬ったイメージで(偏見)キリスト教を見ていたのだということを思い知らされた反省の経験がある。

現代でもさまざまな宗教および教育において、人は分かったつもりで信じたり、記憶しているだけのことを理解と思い込むそして思い上がる傾向がある。トマスの神学は聖なる教えであると同時に本当に分かるということはどういうことか、分かったつもののドクサを克服し、無知を自覚する哲学の営みを示してくれるものである。

山田氏の訳文はトマスの意図を裏切らず真実を本当に伝えるということの難しさを考慮され、トマスとともに哲学をしながら400ページ余りを時を忘れて読ませてしまう実に魅力的な達意の文であると思われる。

佐々木 隆（東北女子大学教授）